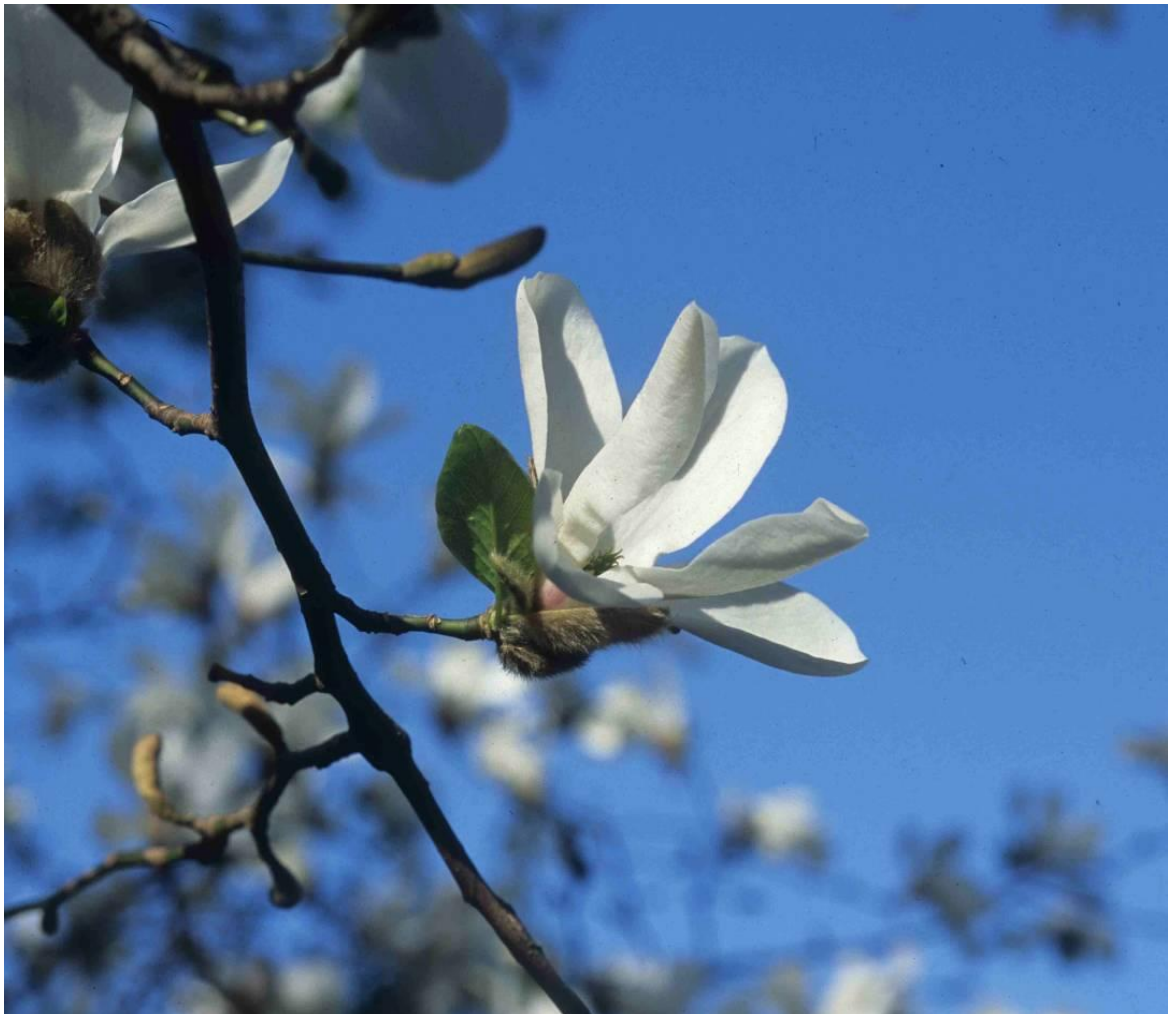


春一番に、ハクモクレンを思わせる白い花を葉に先がけてつけます。コブシの名は、8月ごろにつける実の形が、にぎりこぶしの突起の形に似ているところからつけられています。この実は、9～10月ごろに熟すと実が裂けて、赤色の種を白い糸でつり下げるので、よく観察してみるとおもしろいでしょう。

コブシは、北海道から九州、濟州島に分布していますが、北国に多く見られる落葉小高木で、島根県内には自生はほとんどありません。県内で「こぶし」と呼ばれている木は、コブシではなくタムシバと呼ばれる同じなかまの木です。この2種の花はよく似ており、なかなか見分けることが難しいのですが、コブシは花の付け根のところに小さな葉を付けていることが多いので、この葉の有無で見分けることができます。この2種は、葉が出そろって見分けは簡単で、写真のようにコブシは丸っぽい形ですがタムシバは細長い形をしています。

なお、県内の山の尾根筋などでよく見られるタムシバは、葉を噛むと甘いので「噛む柴」からこの名がついたともいわれています。



▲ コブシの花



▲ コブシの花：花の下側に小さな葉がつく



▲ タムシバの花：花の下側に葉はない



▲ コブシの実：にぎりこぶし状の凸部が特徴



▲ コブシの実：中から赤い種子が顔を出す



▲ 右がコブシの葉、左がタムシバの葉：葉がついていれば簡単に見分けられる